

# ドイツ語条件文体系の歴史的変化

## — 条件文における接続法現在形の用法を中心に —

齋藤 治之

### 1. 序

条件文は一般に条件を表す前提部と結論部から成る。現代ドイツ語の条件文では、前提部と結論部に直説法が現れる条件文 (Realis) および、前提部に接続法第 2 式の現在形、結論部に接続法第 2 式の現在形あるいは未来形が、あるいは、前提部に接続法第 2 式の過去形、結論部に接続法第 2 式の過去形あるいは未来完了形が用いられる条件文の 2 通りの形式が存在し、後者は特に非現実話法 (Irrealis) と呼ばれる：

Wenn er das wüsste, (so) sagte er mir das.

Wenn er das wüsste, (so) würde er mir das sagen.

Wenn er das gewusst hätte, (so) hätte er mir das gesagt.

Wenn er das gewusst hätte, (so) würde er mir das gesagt haben.

古高ドイツ語ではさらに次の 3 つの場合に、条件文に接続法現在形 (接続法第 1 式) が用いられる：

1. 帰結文 (Apodosis) が命令法 (Imperativ)、勧誘法 (Adhortativ)、要求法 (Jussiv) を含む場合。

(1) Sizzo dâr-ûf. ube di*h* is luste. (B.68.20)

「もしあなたがそうしたいなら、その上に座りなさい。」

2. それ自身副文である帰結文に接続法が現れる場合。

(2) Tannân ist nôt.ube uanez sî. daz tero selbûn slahto ouh follez sî (B.196.31)

「そのことから、何か欠けたものが存在するならば、その同じ種類のものの中で満ちた（完全な）ものも必然的に存在する。」

3. 上記 1,2 以外の場合。

(3) Ube dû sia uuola bechennêst. sô habo ih zît. tir dia uuârûn ze ougenne.(B.181.9)

「もしあなたがそのことをはっきりと認識したならば、次はあなたに真の幸福を示す時です。」

1 の場合については、接続法現在形は可能の接続法に遡ると考えられる。また、2 の場合については、副文を上位文とするいわゆる “Nebensatz 2.Grades (2 等級の副文)” の動詞の法が、上位文の動詞の法が接続法の場合は、それに同化されることが古高ドイツ語では普通に見られる現象であり<sup>1</sup>、接続法は、それが上述の 1 の場合に由来するものを除いて、本来は直説法であったものの代わりに用いられている。このように、1, 2 の場合は接続法現在形の出現の理由が説明可能であるが、3 の場合については用例数も限定されており、これまでその起源に関して定説が存在しない。本稿ではこの 3 の場合に限ってその用法と意味について考察してみたい。

既に述べたように、3 の場合については、古高ドイツ語におけるその用例数が極めて少ないために、接続法現在形の意味と用法が説明されることは少数の例外を除いてこれまでほとんどなかった。

例えば、Behaghel は、3 の場合のような接続法現在形による条件文はゲルマン語に本来的なものではなく、例えばゴート語 (4) において、前提文中の接続

法現在形は、ギリシア語の未来形に対応する主文の接続法現在形に同化したものであると説明している<sup>2</sup>。

(4) jabai hōpan skuld sijai þaim siukeins meinaizos hōpau(II.Kor.11.30)

εἰ καυχᾶσθαι δεῖ τὰ τῆς ἀσθενείας μου καυχῆσομαι

「もし誇らねばならないのなら、私は自分の弱さを誇ろう」

それに対し、Wilms は、接続法現在形による条件文がゲルマン語本来のものであることを正当に認め、ゴート語においては条件文中の接続法現在形は行為を、1. 単に想像されたもの、2. 可能なもの、3. 未来に起こるもの、として表すために用いられるとして、接続法現在形による条件文を Potentialis（可能法）と定義している<sup>3</sup>。しかし彼は、古高ドイツ語では、接続法現在形による条件文は資料によって確証することができず、確かに、Potentialis と解釈され得る条件文も幾つかは存在するが、そのような解釈はそれらのどの文においても必ずしも必要ではないと述べている。

Furrer は、Notker 訳の『哲学の慰め』|こにおいては、ラテン語の接続法現在形による .. Potentialis 条件文と古高ドイツ語の接続法現在形による条件文の対応が全く存在しないことから、古高ドイツ語の接続法現在形による条件文はラテン語の Potentialis 条件文とは無関係であると述べ、古高ドイツ語の条件文における接続法現在形の特殊な意味を示唆する一方、その確実な用例が上述 (3) の “Ube dû sia uuola bechennêst. sô habo ih zît. tir dia uuârûn ze ougenne. (B.181.9) „1 例のみであることから、上例の bechennêst の長母音 ê が筆記上のミスによるものでなく本当に正しいものであるかということにも疑問を投げかけている<sup>4</sup>(Furrer1971:69-72)。このように、古高ドイツ語における 3 の場合の接続

法現在形による条件文は諸研究者によってその存在が疑問視されている。しかし、上述の Notker 以外の古高ドイツ語による文献にも、極めて少数ではあるが、3 の場合にあてはまる条件文の用例が存在し、その条件文中の接続法現在形の意味と用法が、ゴート語の条件文中の接続法現在形のそれと対応することを考慮に入れると、古高ドイツ語における 3 の場合の条件文の存在は否定できないものであると考えられる。

そこで、本稿は、従来欠けていた広い視野からの体系的な古高ドイツ語条件文の考察を補うために、次の古高ドイツ語の主要な文献に現れるすべての条件文を、ラテン語からの翻訳である 1、2、3、4 の文献については、ラテン語原文との対応も考慮に入れて、前提文に用いられる動詞の法と時制に従って分類し、さらに、古高ドイツ語と他のゲルマン語における条件文の動詞の法・時制の意味と用法を比較するために、ウルフィラ訳のゴート語聖書に現れるすべての条件文を、同様に、ギリシア語原文との対応も考慮に入れて、前提文に用いられる動詞の法と時制に従って分類することによって、古高ドイツ語ひいてはゲルマン語の条件文における動詞の法・時制の意味と用法を、特に、接続法現在形を中心として、包括的かつ体系的に探ることをその第一の目的としている。この考察を通じて、接続法現在形による条件文を、印欧祖語に遡る条件文の体系の中に位置づけることも可能であると考えられる。また、古高ドイツ語と現代ドイツ語の条件文の体系を比較し、前者から後者への発展の経緯を考察したい。

1. ターティアン (Tatian) : ラテン語による四福音書総合の古高ドイツ語訳、9 世紀前半、東フランク地方言)
2. Notker 訳
  - ① 哲学の慰め (Boethius, De consolatione Philosophiae)

②メルクリウスとフィロロギアの結婚 (Martianus Capella, De nuptiis Philologiae et Mercurii)

(①、②とも 11 世紀初頭、アレマン方言)

3. ベネディクト修道会会則 (Benediktinerregel 9 世紀初頭、アレマン方言)

4. イシドール (Isidor セビリャ大司教 Isidor de Sevilla (560 頃 – 636) による教義論争文書の古高ドイツ語訳、8 世紀末、南ラインフランケン方言を主とする混合方言)

5. オトフリートの福音書 (Otfrids Evangelienbuch; 9 世紀後半、南ラインフランケン方言)

## 2. 印欧祖語及びギリシア語・サンスクリット語・ラテン語の条件文の体系について

印欧祖語における条件文の体系は、ギリシア語及びサンスクリット語の条件文に用いられる動詞の法・時制の比較により以下のように再建される。

1) Realis — 話者が事柄の現実性について主観を交えず中立の立場をとる場合。  
(前提文には直説法が、帰結文にも、普通、直説法が用いられる。)

(5) εἰ δ' οὕτω τοῦτ' ἐστίν ἐμοὶ μέλλει φίλον εἶναι (Hom.A.564)

「もしこのことがそうならば、それは私の気に入ることとなるであろう」

(6) áśvād iyāyēti yád vādanty ójaso jātām utá manya enam (Rv.10.73.10)

「もし彼らが、彼（インドラ）は馬から出たというならば、私は彼が力から生まれたと思う。」

2) Eventualis — ①話者が事柄が未来に起こり得ると想定する場合。(前提文には接続法が、帰結文には、普通、直説法未来形が用いられる。)

②ある一定の条件が充たされれば、繰り返し同一の結果が生じること、あるいは、一般的真理を表す場合。(前提文には接続法が、帰結文には、普通、直説法現在形が用いられる。)

①未来の事柄

(7) εἰ δέ κ ἄτερ δώρων πόλεμον φθεισήνορα δύης οὐκέθ ὁμῶς τιμῆς ἔσεαι πόλεμόν περ ἀλαλκῶν (Hom.I.604)

「もし汝が贈り物がなくなってから人々を殺戮する戦場に出かけるならば、たとえよく敵の攻撃を防いだとしても、決して同様に尊敬を受けることはないであろう)

(8) yád adyá sūrya brávó 'nāgā udyán mitráya várūṇāya satyám vayám devatrádite syāma táva priyáso aryaman grṇántaḥ (Rv.7.60.1)

「もし今日、スーリアよ！汝が昇りながら我々を罪のない者と、ミトラとヴァルナに真実を告げようとするならば、我々は、アディティよ！神々のもとで（罪のない者と）なるように。我々は、アリアマンよ！賛歌を歌う者として汝に好ましい者となるように！」

②反復的事実・一般的真理

(9) εἰ δ ἄρα τις καὶ μῶνος ἰὼν σύμβληται ὁδίτης οὗ τι κατακρύπτουσι ἐπεὶ σφισιν ἐγγύθεν εἰμέν (Hom. η .204)

「またもし誰かが一人で旅歩きをしている時（神々に）出会うと、我々は彼らに近い関係にあるので、彼らは姿を隠すことなどしないものである」

(10) ihéva śṛnva eṣāṃ kāsā hāsteṣu yád vādān(Rv.1.37.3)

「彼ら（マルト神群）の鞭の音が彼らの手の中で鳴り響くと、それはまるでここででもあるかのように聞こえる」

3)Potentialis — 話者が事柄を単に可能なものとして想定する場合。（前提文には希求法が、帰結文にも、普通、希求法が用いられる。）

(11) εἰ μὲν γὰρ μὴ δῶρα φέροι τὰ δ ὅπισθ ὀνομάζοι Ἀτρείδης ἄλλ αἰὲν ἐπιζαφελῶς χαλεπαῖνοι οὐκ ἂν ἐγὼ γέ σε μῆνιν ἀπορρίψαντα κελοίμην Ἀργεῖοισιν ἀμυνέμεναι χατέουσί περ ἔμπης(Hom.I.515)

「もしアトレウスの息子が贈り物を差し出さず、今後も与えることを約束せずに、相変わらず激しく怒ったままではいる場合には、たとえ彼らがそれを必要としていても、私は汝に怒りを捨て去ってアルゴス人達を助けるように命じることはないであろう」

(12) yád aṅgá tvā bharatāḥ saṃtāreyur gavyān grāma iṣitā indrajūtaḥ ārṣād āha prasavāḥ sārgataктаā vo vṛṇe sumatīm yajñīyānām(Rv.3.33.11)

「もし、実際、バラタの末裔達が、牛の群れの略奪を目指した軍勢が、せき立てられ、インドラに鼓舞されて、皆で汝を越えて渡ってしまうことがある場合には、汝の（矢のように）突き進む奔流は素早く流れ行くように！」

4)Irrealis — ①話者が実際には起こり得ない事柄を事実として想定する場合。

（前提文には希求法が、帰結文にも、普通、希求法が用いられる<sup>5)</sup>）

②話者が実際には起こらなかった事柄を事実として想定する場合。(ギリシア語では、前提文と帰結文の両方に、普通(直説法アオリスト形)が用いられる。サンスクリット語では、前提文と帰結文の両方に Konditionalis (条件法) が用いられる。)

①現在の非現実

(13) εἰ τοῦτ' ὅτε λάβοιμεν ἀροίμεθ' ἃ κε κλέος ἐσθλόον(Hom.E.273)

「もし我々がそれら2頭を捕まえば、我々はすばらしい名声を獲得するのに。」

(14) yád iśīyāmṛtānām utá vā mártīyānām jīved in maghāvā máma(Rv.10.33.8)

「もし私が不死なる者達あるいは死すべき者達を自分の意のままにすることができるならば、私の後援者はまだ生きているのに。」

②過去の非現実

(15) Ἐνθα κεν Ἀργεῖοισιν ὑπέρμορα νόστος ἐτύχθη εἰ μὴ Ἀθηναίην Ἥρη πρὸς μῦθον ἔειπεν (Hom.B.155)

「この時、アルゴス人達にとって、天命を超えて、故郷への帰還が成就したであろうに、もしアテーネーに対してヘーレーが(次のように)言わなかったならば。」

(16) sá yád dhaitāvad evābhaviṣyad yāvatyo haivāgre prajāḥ sṛṣṭás tāvatyō hāivābhaviṣyan ná prājaniṣyanta(ŚB4.3.1.25)

「もし彼がそれだけのものであれば、最初に創造されただけの数の生き物しか存在しなかったであろう。それらは子孫をもうけなかったであろう。」

以上のように、4) Irrealis ②において、ギリシア語では直説法アオリスト形が、サンスクリット語では条件法が用いられ、両者の動詞の法が異なっているが、これを除けば、1) Realis, 2) Eventualis, 3) Potentialis, 4) Irrealis ①における両者の動詞の法は一致しており、これらの法の用法が印欧祖語に遡ると考えることが可能である。また、4) Irrealis ②については、希求法完了形がその起源であるという説が有力であるが、その場合、ドイツ語の接続法2式はまさにこの形を引き継ぐものである。

このような条件文の体系を祖語から受け継いだラテン語においては、古典ラテン語期以前に、次に見られるような変化が生じた。

#### 1) Realis

(17) Si quid boni adportatis, habeo gratiam. (Plaut. Poen. 640)

「もしあなたが何か良いことをもたらすならば、感謝します。」

#### 3) Potentialis

(18) si neget adesse, exanimatum amittat domum. (Plaut. Cas. 573)

「もしその者が無いと答えることがあれば、人は彼を魂を失った状態で家に送り届けるであろう。」

#### 4) Irrealis

##### ①現在の非現実

(19) Liber si sim, meo periclo vivam. nunc vivo tuo. (Plaut. Cas. 293)

「もし私が自由であるならば、私は自分自身の判断によって生きるでしょうに。今はあなたの判断によって生きています。」

## ②過去の非現実

(20) si quid eius esset, esset mecum postulatio.(Plaut.Cas.556)

「もし何かそのようなことがあったなら、(彼女は) 私に何かを言うことがあったらうに。」

このように、ラテン語では、印欧祖語の接続法が第3・第4活用の未来形(例 .2.sg. regēs,veniēs) になったために、2) Eventualis が 1) Realis と融合して失われるに至った。また、3) Potentialis と 4) Irrealis には、形態的には祖語の接続法と希求法には遡らないが、意味的には祖語の意志の接続法<sup>6</sup>と希求法を引き継ぐ a- 及び ē- 接続法が用いられている。

古代ラテン語期に続く古典ラテン語期には、接続法現在形による条件文は、少数の例外を除き、専ら 3) Potentialis に限定され、4) Irrealis ①は接続法過去形によって、4) Irrealis ②は接続法過去完了形によって表されるようになった<sup>7</sup>。

印欧祖語からラテン語に至るまでの条件文の体系を図示すれば、以下表 I のようになる。

(Lat.1, Lat.2 はそれぞれ古代ラテン語、古典ラテン語を表す。)

表 1

| IE.   | Real.<br>(Ind.) | Event.<br>(Konj.) | Potent.<br>(Opt.)                                                      | Irreal. ①<br>(Opt.)         | Irreal. ② <sup>8</sup><br>(Opt.Perf.) |
|-------|-----------------|-------------------|------------------------------------------------------------------------|-----------------------------|---------------------------------------|
| Gr.   | Real.<br>(Ind.) | Event.<br>(Konj.) | Potent.<br>Opt.)                                                       | Irreal. ①<br>(Opt.)         | Irreal. ②<br>(Ind.Aor.)               |
| Skt.  | Real.<br>(Ind.) | Event.<br>(Konj.) | Potent.<br>(Opt.)                                                      | Irreal. ①<br>(Opt.)         | Irreal. ②<br>(Kond.)                  |
| Lat.1 | Real.<br>(Ind.) | Real.<br>(Ind.)   | Potent. <sup>9</sup><br>(Konj.Präs.)<br>(Konj.Perf.)<br>(Konj.Imperf.) | Irreal. ①<br>(Konj.Präs.)   | Irreal. ②<br>(Konj.Imperf.)           |
| Lat.2 | Real.<br>(Ind.) | Real.<br>(Ind.)   | Potent.<br>(Konj.Präs.)<br>(Konj.Perf.)                                | Irreal. ①<br>(Konj.Imperf.) | Irreal. ②<br>(Konj.Pluperf.)          |

3. ラテン語条件文の動詞の法・時制と古高ドイツ語条件文の動詞の法・時制の対応について<sup>10</sup>

I. ターティアン (Tatian) —— 表 2

1)Realis (ラテン語 (直説法) …………… 古高ドイツ語 (直説法)) (破線は言語間の対応を示す。以下同様)

(21) Si ergo lumen quod in te est tenebre sunt, ipse tenebre quantae erunt?

「もしあなたの内にある光が闇であるならば、その闇の暗さはどれほどであろうか？」

Oba thaz lioht thaz thar in thir ist finstarnessi ist, thi u finstarnessiu vvuo mihhilu sint?(36.4)

3)Potentialis

ラテン語 Potentialis 6 例 (Konj.Präs.6 例) 中、3 例は古高ドイツ語 Ind.Präs. と、2 例は古高ド Konj.Präs. と、1 例は古高ド Konj.Prät. と対応する。ラテン語 Konj.Präs. と古高ド Konj.Präs.2 例の対応において、古高ドイツ語の接続法は、すべて除外文を導く接続詞 *noba* とともに用いられており、この接続法が可能な接続法ではなく、要求の接続法に由来することがわかる。

(22) et a foro nisi baptizentur non comedunt,

「また市場から帰ると、身を清めなければ、食事をしない」

inti fon strazu noba sih githuahan ni ezzant,(84.4)

他の 4 例中、ラテン語 Konj.Präs. と Irrealis を表す古高ドイツ語 Konj.Prät. との対応 1 例を除いて、他の 3 例はすべて以下のように、ラテン語 Konj.Präs. (Po-

tentialis) に古高ドイツ語 Ind.Präs. (Realis) が対応する。

(23) Si enim diligatis.eos qui vos diligunt, quam mercedem habebitis?

「というのは、もしあなたがたが自分を愛する者達を愛する場合には、あなたがたはどのような報酬を得るであろうか？」

Oba ir thie minnot thie iuuih minnont, uuelihha mieta habet ir thanne? (32.4)

一方、これに対して、ラテン語の直説法と古高ドイツ語の接続法現在形の対応例が 35 例（ラテン語 Ind.Präs. — 古高ド . Konj.Präs.17 例；ラテン語 Ind.Futperf. — 古高ド . Konj.Präs.18 例）存在するが、その中 24 例の帰結文に、以下の例文が示すように、命令文が現れ（場合 1）、10 例が除外文を導く noba とともに用いられている。..

(24) si filius dei es, dic ut lapides isti panes fiant.

「もしあなたが神の子であるならば、これらの石がパンになるように命じなさい。」

oba thu gotes sun sis, quid thaz these steina zi brote uuerden.(15.3)

残り 1 例は (28) のように、帰結文の欠けた不完全な条件文におけるラテン語 Ind.Futperf. と古高ドイツ語 Konj.Präs. の対応であるが、文脈から、帰結文に直説法による平叙文が想定され、この接続法現在形 tuoe が場合 3 に該当することがわかる。

(25) et siquidem fecerit fructum;

「もし（来年）実がなれば（結構です）。」

oba her thanne uuahsamon tuoe: (102.2)

#### 4)Irrealis

①（ラテン語（接続法未完了過去形）……………古高ドイツ語（接続法過去形））

(26) Si diligeretis me, gauderetis utique,

「もしあなたがたが私を愛しているならば、喜んでくれるであろうに。」

Ob ir mih minnotit, thanne gifahit ir,(165.7)

②（ラテン語（接続法過去完了形）……………古高ドイツ語（接続法過去形））

(27) Si cognovissetis me, et patrem meum utique cognovissetis,

「もしあなたがたが私を知っていたならば、私の父も知ったであろう。」

Ob ir mih forstuontit, thanne forstuontit ir ouh minan fater,(162.3)

表 2

|               | Ind.Prs. | Ind.Prt. | Konj.Prs. | Konj.Prt. | 対応なし |
|---------------|----------|----------|-----------|-----------|------|
| Ind.Prs.      | 38       | 0        | 17        | 0         | 0    |
| Ind.Perf.     | 1        | 12       | 0         | 0         | 0    |
| Ind.Fut.      | 3        | 0        | 0         | 0         | 0    |
| Ind.Futperf.  | 62       | 0        | 18        | 0         | 2    |
| Konj.Prs.     | 3        | 0        | 2         | 1         | 0    |
| Konj.Imperf.  | 0        | 0        | 0         | 11        | 0    |
| Konj.Pluperf. | 0        | 0        | 0         | 12        | 0    |
| 対応なし          | 0        | 0        | 0         | 0         | 0    |

（横列は古高ドイツ語、縦列はラテン語を表す）

## II.Notker ①哲学の慰め（De consolatione Philosophiae）—— 表 3

1)Realis（ラテン語（直説法）……………古高ドイツ語（直説法））

(28) Si quis fructus mortalium rerum ullum pondus beatitudinis habet, poteritne deleri memoria illius lucis .i. prosperitatis quantalibet mole ingruentium malorum?

「もし死すべき者達の成功というものが幸福のある重みを持つならば、輝かしい光り、つまり、栄光の記憶は人々を襲う不幸の圧力によって消し去られるであらうか?」

Ube menniskôn dîehsemo. ze deheinerō sâligheite zihet, mag tanne dero skînbârûn êro keâgezôt uuerden. fone deheinemo geskehenemo leide? (83.10)

### 3)Potentialis

ラテン語 Potentialis 59 例 (Konj.Präs.59 例) 中、39 例は古高ドイツ語 Ind. Präs. と、1 例は古高ド . Ind.Prät. と、8 例は古高ド . Konj.Präs. と、4 例は古高ド . Konj. Prät. と対応する (対応なし 7 例)。ラテン語 Konj.Präs. と古高ドイツ語 Konj. Präs. の 8 例の対応中、1 例の帰結文に命令文が現れ (場合 1)、7 例はそれ自身副文である帰結文に接続法が現れる (場合 2)。また、ラテン語の直説法と古高ドイツ語の接続法現在形の対応例が 9 例 (ラテン語 .Ind. Präs. —古高ド Konj. Präs.9 例) 存在する。その中 7 例の帰結文に命令文が現れ (場合 1)、1 例は副文である帰結文に接続法が現れる (場合 2) が、次の 1 例はそのどちらにも当てはまらず、場合 3 に該当すると考えられる。

(29) Qum si perspicaciter intueris. ordo est deinceps monstrare. quae sit uera.

「それをあなたがはっきりと認識したならば、次は真の幸福が何であるか示す番です。」

Ube dû sia uuola bechennêst, sô habo ih zît. tir dia uuârûn ze ougenne.(181.9)

## 4) Irrealis

① (ラテン語 (接続法未完了過去形) ……………古高ドイツ語 (接続法過去形))

(30) His igitur si pro se tecum fonuna loqueretur. quid profecto contra hisceres non haberes.

「それ故に、もしこれらの言葉によって女神 Fortuna が自らのためにあなたと語るならば、あなたはそれに対して反論する言葉を全く持たないでしょうに。」

Ube fortuna sih selbûn sus fersprechen uuolti. dara-gagene nemahtist tu noh erliuten.  
(73.5)

② (ラテン語 (接続法過去完了形) ……………古高ドイツ語 (接続法過去形))

(31) si inquit ego scissem tu nescisses.

「もし私がそれを知っていたら、あなたはそれを知らなかったでしょうに、と彼は言った」

Ube ih sia uuissi chad er. sô uuâre si dih ferholen.(35.26)

表 3

|               | Ind.Präs. | Ind.Prät. | Ind.Perf. | Konj.Präs. | Konj.Prät. | Konj.Pluperf.   | 対応なし |
|---------------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|-----------------|------|
| Ind.Präs.     | 51<br>15  | 1<br>0    | 0<br>1    | 9<br>2     | 0<br>0     | 0<br>0          | 1    |
| Ind.Perf.     | 1<br>1    | 2<br>1    | 3<br>0    | 0<br>0     | 0<br>0     | 0<br>0          | 0    |
| Ind.Fut.      | 1<br>0    | 0<br>0    | 0<br>0    | 0<br>0     | 0<br>0     | 0<br>0          | 0    |
| Ind.Futperf.  | 8<br>6    | 0<br>0    | 0<br>0    | 0<br>0     | 1          | 0<br>0          | 1    |
| Konj.Präs.    | 35<br>19  | 1<br>0    | 0<br>0    | 8<br>0     | 4<br>2     | 0<br>0          | 7    |
| Konj.Imperf.  | 1<br>0    | 0<br>0    | 0<br>0    | 0<br>0     | 24<br>10   | 0<br>0          | 0    |
| Konj.Pluperf. | 0<br>0    | 0<br>0    | 0<br>0    | 0<br>0     | 7<br>2     | 0<br>0          | 1    |
| 対応なし          | 60        | 6         | 0         | 7          | 21         | 1 <sup>11</sup> | 0    |

(横列は古高ドイツ語、縦列はラテン語を表す)

II. Notker ②メルクリウスとフィロロギアの結婚 (De nuptiis Philologiae et Mercurii) —— 表 4<sup>12</sup>

表 4

|               | Ind. Prs. | Ind. Prt. | Konj. Prs. | Konj. Prt. | 対応なし |
|---------------|-----------|-----------|------------|------------|------|
| Ind. Prs.     | 1         | 0         | 0          | 0          | 0    |
| Ind. Futperf. | 0         | 1         | 0          | 0          | 0    |
| Konj. Prs.    | 2         | 0         | 0          | 0          | 0    |
| Konj. Imperf. | 0         | 0         | 0          | 6          | 2    |
| 対応なし          | 7         | 0         | 2          | 4          | 0    |

(横列は古高ドイツ語、縦列はラテン語を表す)

III. ベネディクト修道会会則 (Benediktinerregel) —— 表 5

1) Realis (ラテン語 (直説法) ……………古高ドイツ語 (直説法))

(32) Tunc immaculatus ero coram eo, si observavero me ab iniquitate mea.

「もし私が自分の不正から自らを守るならば、その時私は神の前で汚れない者となるであろう」

denne unbiuamter pim fora imu,ibu pihaltu mih fona unrehte minemu. (Ⅶ 42)

3) Potentialis

ラテン語 Potentialis 25 例 (Konj. Präs. 25 例) 中、7 例は古高ドイツ語 Ind. Präs. と、17 例は古高ド Konj. Präs. と対応する (対応なし 1 例)。ラテン語 Konj. Präs. と古高ド Konj. Präs. の 17 例の対応中、4 例の帰結文に命令文が現れ (場合 1)、残り 13 例はすべて場合 3 に当てはまる。場合 3 に該当するこれら 13 例 (Ⅶ 40 (2 例), Ⅶ 45 (3 例), Ⅶ 48 (2 例), Ⅶ 49 (3 例), Ⅶ 50 (2 例), XL Ⅲ 101) 中、以下の 1 例を除き、他はすべてⅦ 40 と同一の構文に用いられている。

(33) Nam si foras oratorio remaneat, erit forte talis, qui se aut collocet et dormiat

「というのは、もし(遅刻した者達<sup>が</sup>)礼拝堂の外に留まっていることがあれば、横になって眠るような者がひょっとしているかもしれない」

Keuuisso ibu uzzana chirihhun piliben.....kestatot.....slaffit(XL III 101)

(34) primus itaque humilitatis gradus est, si timorem dei sibi ante oculos semper ponens oblivionem omnino fugiat et semper sit memor omnia, quac praecepit deus,

「もし(人が)神への恐れを常に念頭に置きながら忘却を完全に捨て去り、神が命じた事を常に覚えているならば、(それが)へりくだりの最初の段階である」

eristo inunu dera deoheiti stiagilsprozzo ist, ibu forahntun cotes imu fora augom simblum sezzeinti akezzalii alles fleohe indi simblum si kehuctic alliu, dei kipoot cot,(VII 40)

このⅦ 40に見られるような対応は、“ベネディクト修道会会則”の翻訳方法が行間逐語訳(Interlinearversion)によっているために生じたと考えることも可能であるが、次の同じ構文におけるラテン語 Konj.Präs. と古高ドイツ語 Ind.Präs. の対応から、これが、必ずしも、機械的な翻訳によるものでないことがわかる。

(35) Secundus humilitatis gradus est, si propriam quis non amans voluntatem desideria sua non delectetur implere,

「もし人が自分自身の願いを愛することなく、自分の欲求を満たすことを喜ばないならば、(それが)へりくだりの第二の段階である。」

andar dera deomuati stiagilsprozzo ist, ibu eiganan huuelih niminnoot uuillon kirida sina nist kelustidoot erfullan,(Ⅶ 44)

また、ラテン語 Ind. Präs. と古高ドイツ語 Konj.Präs. の対応例 3 例中、2 例の帰結文には命令文が現れ（場合 1）、他の 1 例はそれ自身副文である帰結文に接続法が現れる（場合 2）

表 5

|              | Ind.Präs. | Konj.Präs. | 対応なし |
|--------------|-----------|------------|------|
| Ind.Präs.    | 15<br>5   | 2<br>1     | 2    |
| Ind.Perf.    | 1<br>0    | 0<br>0     | 0    |
| Ind.Pluperf. | 17<br>14  | 2<br>2     | 5    |
| Konj.Präs.   | 7<br>0    | 14<br>3    | 1    |
| 対応なし         | 0         | 0          | 0    |

（横列は古高ドイツ語、縦列はラテン語を表す）

#### IV . イシドール (Isidor) —— 表 6

1)Realis（ラテン語（直説法）……………古高ドイツ語（直説法））

(36) Item si Christus dominus non est quis est ille dominus exercituum, qui a domino exercituum mittitur?

「同様に、もしキリストが主でないならば、万軍の主から遣わされたあの万軍の主は誰であろうか？」

Ibu nu christ druhtin nist huuer ist dher uuerodheoda druhtin, dher fona uuerodheoda druhtine uuard chisendit?(215)

#### 3)Potentialis

ラテン語 Potentialis3 例（Konj.Präs.3 例）中、2 例は古高ドイツ語 Ind. Präs. と、1 例は古高ド Konj.Präs. と対応するが、この後者の対応における古高ド Konj.

Präs. は、以下のように、除外文を導く接続詞 *nibu* とともに用いられたものである。

(37) *eo quod filius non nisi ex duobus nascatur,*

「というのは、2つのものから生まれたのでないならば、息子は存在しないからである。」

*bidhiu huuanda sunu nist, nibu fona zuuem chiboran uuerdhe.(123)*

また、ラテン語 Ind. Präs. と古高ドイツ語 Konj.Präs. の対応例 1 例の場合も同様である。

#### 4) Irrealis

(古高ドイツ語 (接続法過去形) ; 前提文 1 例のみ)

(38) *Si christus deus non est, cui dicitur in psalmis: Ibu christus auur got ni uuari.  
dhemu in psalmom chiquhedan uuard:(136)*

「もし (それはあり得ないことであるが) 仮に、キリストが、詩篇で次のように語りかけられた、神でないならば」

(ラテン語 (接続法過去完了形) ……………古高ドイツ語 (接続法過去形) (前提文のみ)

(39) *Nisi dominus reliquisset nobis semen.*

「もし主が我々に子孫を残さなかったならば。」

*Nibu druhtin uns firleazssi samun.(573)*

表 6

|               | Ind.Präs. | Ind.Prät. | Konj.Präs. | Konj.Prät. | 対応なし |
|---------------|-----------|-----------|------------|------------|------|
| Ind.Präs.     | 5         | 0         | 1          | 1          | 0    |
| Ind.Perf.     | 0         | 1         | 0          | 0          | 0    |
| Ind.Futperf.  | 1         | 0         | 0          | 0          | 0    |
| Konj.Präs.    | 2         | 0         | 1          | 0          | 0    |
| Konj.Pluperf. | 0         | 0         | 0          | 1          | 0    |
| 対応なし          | 2         | 0         | 0          | 0          | 0    |

(横列は古高ドイツ語、縦列はラテン語を表す)

## V. オトフリートの福音書 (Otfrids Evangelienbuch) —— 表 7

### 1)Realis (古高ドイツ語 (直説法))

(40) Oba iz zi thiū wirdit, thaz thaz salz firwirdit; wer findit untar manne, mit wiu man gisalze iz thanne?(II.17.7)

「もし塩が効かなくなることになれば、人々の誰がそれ (塩) に塩味をつけるすべを見いだすであろうか?」

### 3)Potentialis

古高ドイツ語 Konj.Präs.18 例 16 中、17 例はその帰結文に命令文が現れる (場合 1) が、以下の 1 例は場合 1・2 に当てはまらず、場合 3 に該当すると考えられる。

(41) Ob ir in muatiu lazet, thaz sunta ir io bilazet<sup>13</sup>: so dilont sino guati thio iuo missidati;(II.21.41)

「もしあなたがたが (人々の) 罪を許すことを自分の心に認める (心に決める) ならば、主の卓越した性質 (慈しみ) はあなたがたのあやまちを消し去ることになる。」

この文は、新約聖書の (45) に対応する箇所であり、ラテン語 Ind.Futperf. と古

高ドイツ語 Konj.Präs. が対応していることがわかる。

(42) si enim dimiseritis hominibus peccata eorum, dimittet et vobis pater caelestis delicta vestra;(Mt.6.14)

「もしあなたがたが人々の罪を許すならば、天の父もあなたがたのあやまちを許すであろう。」

#### 4)Irrealis

(古高ドイツ語 (接続法過去形))

(43) Ob ih giwisso iz westi, ih scribi iz hiar in festi;(I.19.27)

「もし私がそれを確実に知っているならば、私はそれをここにしっかりと書き記すであろうに。」

(古高ドイツ語 (接続法過去形))

(44) Ob er sprachi ubar al, so man zi gotes sune skal, sprachi thanne in thesa wis,(II.4.71)

「もし彼が、神の息子に対してふさわしい方法で語ったのなら、彼はその場合このように語ったであろうに」

表 7

|     | Ind.Präs. | Ind.Prt. | Konj.Präs. | Konj.Prt. |
|-----|-----------|----------|------------|-----------|
| 用例数 | 42<br>0   | 6<br>0   | 17<br>14   | 27<br>6   |

4. ギリシア語条件文<sup>14</sup>の動詞の法・時制とゴート語条件文の動詞の法・時制の対応について—— 表 8

1)Realis (ギリシア語 (直説法) ……………ゴート語 (直説法))

(45) εἰ δὲ ὑμεῖς οὐκ ἀφίετε, οὐδὲ ὁ πατὴρ ὑμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς ἀφήσει τὰ  
παραπτώματα ὑμῶν

「もしあなたがたが許さないならば、天にいるあなたがたの父もあなたがたの  
あやまちを許さないであろう。」

ih jabai jus ni afletiþ, ni þau atta izwar sa in himinam afletiþ izwis missade-  
dins izwaros.(Mk.11.26)

2)Eventualis

ギリシア語 Eventualis133 例 (Konj.Präs.45 例 ,Konj.Perf.2 例 , Konjj.Aor.86 例) 中、  
それぞれ 26 例 ,2 例 ,63 例がゴート語 Ind. Präs. と対応し、残り 42 例中 38 例は  
ゴート語 Konj.Präs. (ギリシア語 Konj.Präs.18 例 ,Konj.Aor.20 例) に、3 例はゴー  
ト語 Konj.Prät. (ギリシア語 Konj.Präs.1 例 ,Konj.Aor.2 例) に対応する (対応な  
し 1 例)。ギリシア語 Konj. とゴート語 Konj.Präs. の対応例 38 例中、25 例には  
以下のように帰結文に命令文が現れる (場合 1)。

(46) καὶ ἐὰν σκανδαλίζη σε ἡ χεὶρ σου, ἀπόκοπον αὐτήν

「それでももしあなたの一方の手があなたに罪を犯させるならば、それを切り捨てなさい。」

jah jabai marzjai þuk handus þeina, afmait þo(Mk.9.43)

しかし、ギリシア語 Konj. とゴート語 Konj.Präs. の残り 13 の対応例は、場合 1、  
2 に当てはまらず、場合 3 に該当すると考えられる。その中 3 例は、以下のように、  
ギリシア語の帰結文に未来形が用いられており、これらの条件文が Eventualis  
①に属することがわかる。ゴート語の最初の 2 例の帰結文にはそれぞれ接続法

現在形 *gaheilaiþ*, *sijau* が、残り 1 例には直説法現在形 *wairþiþ* が用いられている<sup>15</sup>。

(47) καὶ ἐὰν ᾗ ἐκεῖ εἰρήνης ἐπαναπαύσεται ἐπ' αὐτὸν ἡ εἰρήνη ὑμῶν

「そしてもし平安の子がそこにいれば、あなたがたの（祈る）平安はその人の上に留まるであろう。」

jah jabai sijai jainar sunus gahwairþjis, gaheilaiþ sik ana imma gawairþi izwar (Luk.10.6)

(48) ἐὰν δὲ θελήσω καυχήσασθαι, οὐκ ἔσομαι ἄφρων, ἀλήθειαν γὰρ ἐρῶ

「もし私が誇ろうとすれば、真実を語るのであるから、愚か者にはならないであろう。」

abþan jabai wiljau hþopan, ni sijau unwita,unte sunja qīþa,( II .Kor.12.6)

(49) ἐὰν οὖν τις ἐκκαθάρῃ ἑαυτὸν ἀπὸ τούτων, ἔσται σκευὸς εἰς τιμὴν, ἡγιασμένον, καὶ ἐὺχρηστον τῷ δεσπότῃ.

「もし人がそれらのものから自らを清めるならば、彼は聖別され、主人に役立つ、栄光の器となるであろう。」

abþan jabai hvas gahrainjai sik þizeī, wairþiþ kas du swerīþai, gaweīhaiþ, bruk frauþin, ( II .Tim.2.21)

この用法は、上述の、主にラテン語未来完了形との対応を示す古高ドイツ語の次の 3 例にも認められる。

(25) Oba her thanne uuahsamon tuoe:(Tat.102.2)

「もし（来年）実がなれば（結構です）」

(29) ube dû sia uuola bechennêst. sô habo ih zît, tir dia uuârûn ze ougenne.(B.181.9)

「もしあなたがそのことをはっきりと認識したならば、次はあなたに真の幸福を示す時です。」

(41) Ob ir in muat iu lazet,.thaz sunta ir io bilazet: so dilont sino guati thio iuo missidati;(Ot. II .21.41)

「もしあなたがたが（人々の）罪を許すことを自分の心に認めるならば、主の慈しみはあなたがたのあやまちを消し去ることになる」

Eventualis 条件文のもう一つの典型的な用法は反復的事実・一般的真理を表す用法であり（Eventualis ②）、この用法を示す以下の Eventualis 条件文（1 例は認容文）に用いられているギリシア語 Konj.10 例にゴート語 Konj.Präs.10 例が対応している。ギリシア語の帰結文には、断定的な否定を表す “οὐ μή+ 接続法” (53) を除いてすべて直説法現在形が、ゴート語の帰結文には、(52),(54) に状態動詞 *wisan* の直説法現在形が、(50),(53) に接続法現在形が用いられている。また、後述のギリシア語 Realis との 2 例の対応においては、帰結文にそれぞれ接続法現在形 (55) と直説法現在形 (56) が用いられている。（(51) には帰結文が欠けている。）

(50) ἐὰν τις τὸν λόγον μου τηρήσῃ, οὐ μὴ γεύσῃται θανάτου εἰς τὸν αἰῶνα.

「私の言葉を守る者は、誰でも永遠に死を味わうことがないであろう。」

jabai huas mein waurd fastai, ni kausjai dauþau aiwa dage.(Joh.8.52)

(51) ἐὰν εἴπῃ ἄνθρωπος τῷ πατρὶ ἢ τῇ μητρὶ κορβαῦν ὃ ἐστὶν ὄρωρον ὃ ἐὰν ἐξ

ἐμοῦ ὠφεληθῆς.

「もし人が父または母に向かって、“私からあなたが役に立つものとして受け取るものはコルバーンつまり、供え物です”と言え（それでよいとして、）」

jabai qibai manna attin seinamma aip̄bau aip̄ein: kaurban, ʔatei ist maip̄ms, ʔishvah ʔatei us mis gabatnis;(Mk.7.11)

(52) καὶ ἐὰν ἔχω προφητείαν καὶ εἰδῶ τὰ μυστήρια πάντα καὶ πᾶσαν τὴν γνῶσιν καὶ ἐὰν ἔχω πᾶσαν τὴν πίστιν ὥστε ὄρη μεθιστάνειν ἀγάπην δὲ μὴ ἔχω οὐδὲν εἶμι.

「たとえまた、私が予言する力を持ちあらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、また、山を移すほどのあらゆる信仰を持っていたても、もし愛がなければ私は無である。」

jah jabai habau praufetjans jah witjau allaize runos jah all kunʔi jah habau alla galaubein, swaswe fairgunja miʔsatjau, iʔ friap̄wa ni habau.ni waihts im (I.Kor.13.2)

(53) καὶ ἐὰν ψωμίσω πάντα τὰ ὑπάρχοντά μου, καὶ ἐὰν παραδῶ τὸ σῶμά μου ἵνα καυθήσωμαι, ἀγάπην δὲ μὴ ἔχω, οὐδὲν ὠφελοῦμαι

「たとえまた、私が自分の全財産を人に施しても、また、自分の体を焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、それは私にとって何の役にも立たない。」

jah jabai fraatjau allos aih̄tins meinos, jah jabai atgibau leuk mein ei ga-brannjaidau, friap̄wa ni habau. ni waiht botos mis taujaui(I.Kor.13.3)

次の1例は条件文というよりは、むしろ、認容文として解釈され得る。

(54) καὶ ἐὰν ἀγαθοποιῇτε τοὺς ἀγαθοποιούντας ὑμᾶς ποία ὑμῖν χάρις ἐστίν;  
「もしあなたがたが自分達に良いことをしてくれる人々によくしたとしても、  
どのような感謝をあなたがたは受けるであろうか?」

jah jabai þiup taujaid þaim þiup taujandam izwis, þa izwis laune  
ist?(Luk.6.33)

また、ギリシア語 Ind. Präs. とゴート語 Konj.Präs. の対応 20 例 (B 写本 22 例) 中、  
次の 2 例もここに属している。

(55) εἰ καυχᾶσθαι δεῖ τὰ τῆς ἀσθενείας μου καυχῆσομαι

「もし誇らねばならないのなら、私は自分の弱さを誇ろう」

jabai þopan skuld sijai þaim siukeins meinaizos þopau(II.Kor.11.30)

(56) εἰ περιτομὴν ἔτι κηρύσσω τί ἔτι διώκομαι

「私が今でも割礼を宣べ伝えているならば、なぜ今なお迫害されることがある  
のか?」

jabai bimait merjau, duþe þanamais wrikada?(Gal.5.11)

ゴート語接続法現在形のこの用法は、古高ドイツ語の次の例文における接続法  
現在形の用法にも、両言語ともそれぞれ Eventualis 及び Potentialis との対応と  
いう違いはあるが、認められる。

(33) keuuisso ibu uzzana chirihhun piliben.....kestatot.....slaffit(Benedikt.XL Ⅲ 101)

「というのは、もし彼らが礼拝堂の外に留まっていることがあれば、横になっ  
て眠る (者もいるかもしれない)」

(34) eristo inunu dera deoheiti stiagilsprozzo ist, ibu forahntun cotes imu fora augom  
simblum sezzenti akezzalii alles fleohe indi simblum si kehuctic alliu, dei kipoot  
cot,(Benedikt. VII 40)

「もし（人が）神への恐れを常に念頭に置きながら忘却を完全に捨て去り、神  
が命じた事を常に覚えているならば、（それが）へりくだりの最初の段階であ  
る。」

#### 4)Irrealis

（ギリシア語（直説法未完了過去形）……………ゴート語（接続法過去形））

(57) εἰ ὁ θεὸς πατὴρ ὑμῶν ἦν ἡγαπᾶτε ἂν ἐμέ

「もし神があなたがたの父であるならば、あなたがたは私を愛するであろうに」

jabai guþ atta izwar wesi, friodedeiþ þau mik,(Joh.8.42)

（ギリシア語（直説法アオリスト形）……………ゴート語（接続法過去形））

(58) εἰ ἐν Σοδόμοις ἐγένοντο αἱ δυνάμεις αἱ γινόμεναι ἐν σοί ἐμειναν ἂν  
μέχρι τῆς σήμερον

「もし汝の中でなされた力にあふれた業がソドムでなされたならば、その町は  
今日までなお残っていたであろうに。」

jabai in Saudaumjam waurþeina mahteis þos waurþanons in izwis,  
aiþþau eis weseina und hina dag.(Mt.11.23)

表 8

|              | Ind.Prs. | Ind.Prt. | Konj.Prs.  | Konj.Prt. | 対応なし |
|--------------|----------|----------|------------|-----------|------|
| Ind.Prs.     | 55<br>0  | 0<br>0   | 20/22<br>0 | 0<br>0    | 1    |
| Ind.Perf.    | 3/4<br>0 | 5/4<br>0 | 0<br>0     | 0<br>0    | 0    |
| Ind.Imperf.  | 0<br>0   | 1<br>0   | 0<br>0     | 6<br>10   | 0    |
| Ind.Pluperf. | 0<br>0   | 0<br>0   | 0<br>0     | 0<br>1    | 0    |
| Ind.Aor.     | 2<br>0   | 24<br>0  | 0<br>0     | 2<br>7    | 1    |
| Konj.Prs.    | 26<br>0  | 0<br>0   | 16<br>0    | 1<br>0    | 0    |
| Konj.Perf.   | 1<br>0   | 0<br>0   | 0<br>0     | 0<br>0    | 0    |
| Konj.Aor.    | 61<br>0  | 0<br>0   | 15<br>0    | 2<br>0    | 1    |
| 対応なし         | 4        | 1        | 3          | 2         | 0    |

(横列はゴート語、縦列はギリシア語を表す)

## 5. 結論

印欧祖語の 1. 接続法と 2. 希求法は、その意味と用法に従って、それぞれ 1. ①意志の接続法 (Conjunctivus voluntativus)、②期待の接続法 (Conjunctivus eventualis; 2. ①願望の希求法 (Optativus desiderativus)、②可能の希求法 (Optativus potentialis) に区分されるが、ゲルマン語においてはこれらすべての用法が、起源的には印欧祖語の希求法に遡る接続法によって引き継がれた。しかし、従来、ゲルマン語の接続法が 1. 要求の接続法 .. (voluntativer Konjunktiv), 2. 可能の接続法 (potentialer Konjunktiv) に区分されることが常であったために、例えば、上述 1. ①意志の接続法の (59) のような対応にも見られるように、印欧祖語の接続法がゲルマン語の接続法にも引き継がれているにもかかわらず、ゲルマン語接続

法の上述の2区分の結果、本来は 1. ②期待の接続法と 2. ②可能の希求法の両方を引き継ぐ可能の接続法 (potentialer Konjunktiv) が、可能の希求法 (Optativus potentialis) と同一視され、接続法現在形による条件文は、Potentialis と呼ばれることが一般的であった<sup>17)</sup>。

(59) he wasjaima? (Mt.6.31)

「何を我々は着ようか？」

τί περιβαλώμεθα;

接続法現在形による条件文を Potentialis とのみ定義することは、しかしながら、古高ドイツ語 (25),(29),(41) 及びゴート語 (47),(48),(49) が、未来に起こり得ると想定される事柄を表す Eventualis に属することから、不十分であることがわかる。また、この形式による条件文が、古高ドイツ語 (34) VII 40(2例), VII 45(3例), VII 48(2例), VII 49(3例), VII 50(2例),(33) においてラテン語 Potentialis に、ゴート語 (50) – (56) においてギリシア語 Eventualis ②に対応する。これらは、用例数が極めて僅かなために、その意味を確定することは困難であるが、1)Realis, 2) Eventualis ①, 4)Irrealis に属するものでないことは確かであり、また、ゲルマン語の接続法が印欧祖語の 1. ②期待の接続法, 2. ②可能の希求法の両方を引き継ぐことから、これらは 2)Eventualis ②, 3)Potentialis の2つの意味を併せ持つと考えることも可能である。そこで、ゲルマン祖語、ゴート語及び古高ドイツ語の条件文の体系は以下のように図示することができる。

| Germ. | Real.(Ind.) | Event.<br>(Konj.Prs.) | Potent.<br>(Konj.Prs.) | Irreal. ①<br>(Konj.Prt.) | Irreal. ②<br>(Konj.Prt.)                   |
|-------|-------------|-----------------------|------------------------|--------------------------|--------------------------------------------|
| Got.  | Real.(Ind.) | Event.<br>(Konj.Prs.) | Potent.<br>(Konj.Prs.) | Irreal. ①<br>(Konj.Prt.) | Irreal. ②<br>(Konj.Prt.)                   |
| Ahd.  | Real.(Ind.) | Event.<br>(Konj.Prs.) | Potent.<br>(Konj.Prs.) | Irreal. ①<br>(Konj.Prt.) | Irreal. ②<br>(Konj.Prt.,Konj.<br>Pluperf.) |

このようにして、現代ドイツ語ではインド・ヨーロッパ祖語の接続法 (Konjunktiv, Subjunktiv) に関して、1) 期待の接続法 (conjunctivus eventualis)、2) 意志の接続法 (conjunctivus voluntativus)、のうち、1) 「事柄が場合によっては未来に起こり得る」という「偶発性」(Eventualität) の表現として、「万一～の場合、たとえ～であっても」を意味する「sollen の接続法 II 式 + 不定詞」の形式が用いられる：

Wenn/Falls es morgen regnen sollte, bleiben wir lieber zu Hause.

Auch wenn er mir eine Million Euro bieten sollte, ich würde das Haus nicht verkaufen.

また、2) 意志の接続法 (conjunctivus voluntativus) はドイツ語における勧誘の接続法 (Adhortativ) として、「勧誘・提案」を表すために用いられる：

Gehen wir durch den Park spazieren!

インド・ヨーロッパ祖語の希求法 (Optativ) に関して、1) 願望の希求法 (optativus desiderativus)、2) 可能性の希求法 (optativus potentialis)、のうち、1) の話者の「願望・要求」を表すために、ドイツ語では接続法 I 式による要求話法および接続法 II 式による非現実話法が用いられる：

Es gebe doch keinen Krieg!

Hätte ich doch viel Geld!

また、2) は「想像・仮定」に基づく事柄を表し、ドイツ語における接続法 I 式による間接話法の起源である：

Er sagte, er sei damals in München gewesen.

ドイツ語史においては次の例のように、可能の希求法に由来する「想像・假定」の接続法第1式が非現実を表す接続法第2式に置き換えられるという現象が見られる。これにより、現代ドイツ語では「想像・假定 (potentialis)」と「非現実 (irrealis)」は接続法第2式という同じ形で表現されるようになった：

Mhd. ir houbet ist sô wünnenrîch, als ez mîn himel welle sîn (Walter 53.35)

„Ihr Haupt ist so voller Wonne, als ob es mein Himmel sein wollte (wtl. wolle).“

doch ist ir deheine, weder grôz noch kleine, der versagen mir iemer wê getuo (Walther 53.22) „Aber unter ihnen allen gibt es keine einzige, deren „Nein“ mir je Schmerz bereiten könnte.“

従って、次のような文における接続法第2式は irrealis ではなく、potentialis の用法であると考えることが可能である<sup>18</sup>：

Es ist denkbar, dass Sabine diesen Herbst wieder nach Deutschland zurückkehrt. Sie würde dann etwa sechs Jahre in den USA tätig gewesen sein.

1 Behaghel 1928: 669-670

2 Behaghel 1928: 677

3 Wilmanns 1906: 226-227

4 Furrer 1971: 69-72

5 古典ギリシア語では Irrealis ①に関して、前提文および帰結文に未完了過去形が用いられるが、希求法が印欧祖語本来のものである。高津 (1971:402) 参照。

6 ラテン語では、祖語の①意志の接続法、②期待の接続法のうち、後者は直説法未来形となったが、前者は例えば次の例文のような考慮・懸念の接続法 (conjunctivus deliberativus, dubitativus) の用法によって引き継がれている：

quid ego nunc faciam? (Plaut.Men.963)

「今、私は何をすればよいのだろうか？」

- 7 この区分は厳密なものではなく、古代ラテン語期においても接続法過去完了形による Irrealis ②の例も、また、古典ラテン語期においても接続法現在形による Irrealis ①の例もともに存在する。Mugler (1980:128) 参照。
- 8 印欧祖語における Irrealis ②はサンスクリット語とギリシア語の対応が一致しないが、近年、祖語の形として両者の語形とは異なる希求法完了形がその候補として挙がっている。この問題に関して S.W.Jamison(Where Are All the Optatives: In „East and West (2009) p.39-40“) は次のように述べている：In Kmmel 's vast work on the Indo-Iranian perfect, he devotes less than one page to the function of the perfect optative(2000:89-90). He finds evidence in a few passages for the value of „Irrealis/Potentialis der Vergangenheit“, corresponding to the Younger Avestan usage. また、希求法完了形こそまさにドイツ語の接続法第2式の起源でもある：\**qeurti* > *würde*. 非現実性については Laftman (1931:284-287) 参照。
- 9 Kühner (1988:395-400) に従えば、古代ラテン語では、3) ①現在における可能な事柄、②過去における可能な事柄のうち、①は接続法現在形（完了形）、②は次の例文のように接続法未完了過去形によって、4) ①現在の非現実な事柄、②過去の非現実な事柄のうち、①は接続法現在形、②は接続法未完了過去形によってという具合に、3) Potentialis、4) Irrealis が同じ形式によって表されていたが、古典ラテン語の時代になって両者の分化が行われたとされている。因みに、Konj.Präs. と Konj.Prät. は未完了的・完了的というアスペクトの対立を表している：
 

si invitare nos paulisper pergeret, ibidem obdormissemus:(Plaut.Rud.590)

「もし、彼が我々をもてなし続けることがあったならば、我々はその場ですぐに眠り込んだであろうに」
- 10 表2以下のラテン語と古高ドイツ語、およびギリシア語とゴート語の対応用例数は筆者著『古高ドイツ語の条件文における接続法現在形の意味と用法について（東京大学言語学論集(1995) 14、p.296 - p.311)』に基づく。
- 11 Notker『哲学の慰め』において初めて、ラテン語との対応は存在しないが、現代ドイツ語と同様に接続法過去完了形による Irrealis ②の用例が1例(B.376.14)登場する。

- 12 『哲学の慰め』と同じ訳者による翻訳作品であるため、例文は省略する。
- 13 Kelle の Glossar では、この箇所は “Ob ir in muat lâzet, thaz sunta ir io biâzet” のように直説法と解釈されているが、Erdman(1973:170) も述べているように、thaz 以下の目的文には、当然、接続法 bilâzet が用いられ、またこの動詞と韻を踏む条件文中の動詞も lâzet でなければならない。そこで、この箇所は Piper 版の “Ob ir in muat lâzet, thaz sunta ir io biâzet” が正しいと考えられる。
- 14 新約聖書ギリシア語においては、3) Potentialis 条件文の用例は存在しない。
- 15 ゴート語の wairpan は、接頭辞 ga- を付加することなしに、それ自体が完了的なアスペクトを持ち、従って現在形が未来の事柄を表す。また、wisan の接続法現在形 sijai は Streitberg も指摘しているように、継続的未来 (das durative Futurum) の役割を果たしている。Streitberg (1981:45) 参照。
- 16 帰結文における接続法現在形のうち、(50) kausjai、(53) taujau は未完了のアスペクトを持ち、未来の一回的な動作・状態ではなく、反復的な動作・状態および一般的真理を表している。
- 17 例えば、Streitberg(1981:91) では、(53)、(55) がともに “Die potentiale Bedingung” と定義されている。
- 18 O.Leirbukt: Untersuchung zur temporalen Umfunktionierung des Konjunktivs II im heutigen Deutsch, p.24.

この例文が示すように、これから起こる可能性があるという点に着目すれば Potentialis であり、まだ起こっていないという点に着目すれば Irrealis である。従来、ドイツ語教育においては後者の解釈に重点が置かれていた。しかし、“Wenn ich ein Vogel wäre, könnte ich zu dir fliegen.” のような Irrealis のみを表す接続法と、上述の “Sie würde dann etwa sechs Jahre in den USA tätig gewesen sein.” の意味的な差は歴然としており、その点からも Irrealis と Potentialis の区別は有益であると考えられる。また、E.Smirnova(2006:p.11f.) も würde + 不定詞の多義性について詳しく論じている。

尚、現代英語においては、古風な文体とはいえ、仮定法現在形による、2) Eventualis ①: “If he do so, he will do wrong.”、3) Potentialis: „If this be so, we are all at fault.” が今日に至るまで存続していることは注目に値する。

テキスト

Tatian, hrsg. v. E.Sievers, Ferdinand Schöningh Paderborn 1960

Notker des Deutschen hrsg. v. E.H.Seprt / T.Starck

1. Boethius, De consolatione Philosophiae, Max Niemeyer Halle 1966

2. Martianus Capella, De nuptiis Philologiae et Mercurii, Halle 1966

Die Althochdeutsche Benediktinerregel des Cod.Sang 916, hrsg. v. U.Daab, Max Niemeyer  
Tübingen 1959

Der althochdeutsche Isidor, hrsg. v. H.Eggers, Max Niemeyer Tübingen 1964

Otfrids Evangelienbuch, hrsg. v. O.Erdmann, Max Niemeyer Halle 1882

Die Gotische Bibel, hrsg. v. W.Streitberg, Carl Winter Heidelberg 1971

略語一覧

言語名 ..

Germ.: Germanisch                      Lat.: Lateinisch

Got.: Gotisch                              Ahd.: Althochdeutsch

Gr.: Griechisch                            Skt.: Sanskrit

IE.: Indo-Europäisch

作品名及び人名

B.: Boethius, De consolatione Philosophiae

Benedikt.: Benediktinerregel

Cas.: Casina

Gal.: Galater

Hom.: Homerus

Joh.: Johannes

Kor.: Korinther

Luk.: Lukas

Men.: Menaechmi

Mk.: Markus

Mt.: Matthaeus  
 Ot.: Otfriids Evangelienbuch  
 Plaut.: Plautus  
 Rud.: Rudens  
 Rv.: R g-Veda  
 ŚB.: Śatapatha Brāhmaṇa  
 Tat.: Tatian  
 Tim.: Timotheus

術語 ..

|                             |                   |                           |
|-----------------------------|-------------------|---------------------------|
| Aor.: Aorist                | Ind.: Indikativ   | Präs.: Präsens            |
| Kond.: Konditional          | Irreal.: Irrealis | Prät.: Präteritum         |
| Event.: Eventualis          | Opt.: Optativ     | Real.: Realis             |
| Fut.: Futurum               | Perf.: Perfekt    | Konj.: Konjunktiv         |
| Futperf.: Futurum Perfectum |                   | Pluperf.: Plusquamperfekt |
| Imperf.: Imperfekt          |                   | Potent.: Potentialis      |

参考文献

Behaghel, Otto. 1928: Deutsche Syntax Bd.3. Heidelberg Carl Winter.  
 Delbrück, Berthold. 1904: Der germanische Optativ im Satzgefüge. In: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur 29 pp.201-304.  
 Erdmann, Oskar. 1973: Untersuchung über die Syntax der Sprache Otfriids. Halle 1874; Nachdr. Hildesheim:Georg Olms  
 Furrer, Dieter. 1971: Modusprobleme bei Notker. Berlin: de Gruyter.  
 Kelle, Johann. 1963: Otfriids von Weissenburg Evangelienbuch Bd.3 Glossar, Neudruck der Ausgabe 1881. Aalen: Otto Zeller.  
 高津春繁 .. 1971: 『ギリシア語文法』 東京 : 岩波書店  
 Kühner, Raphael / Stegmann, Carl. 1988: Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache Bd.2. Hannover: Verlag Hahnsche Buchhandlung  
 Kümmel, Martin 2000: Das Perfekt im Indoiranischen, Wiesbaden. Reichelt Verlag 2000  
 Laftman, Emil. 1931: Zur Frage des Modus in deutschen Bedingungsnebensätzen “. In: Zeit-

- schrift für deutsche Philologie 56. pp.284-309.
- Leirbukt, Oddleif 2008: Untersuchung zur temporalen Umfunktionierung des Konjunktivs II im heutigen Deutsch. Tübingen. Niemeyer
- Mugler, France. 1980: „Concerning the Usage of the Conditional Sentence in Latin“. In: Glotta 58 pp.119-132.
- Piper, Paul. 1982: Otfrids Evangelienbuch. Nachdr. der Ausgabe 1882. Hildesheim: Georg Olms.
- 斎藤治之 1995: 『古高ドイツ語の条件文における接続法現在形の意味と用法について』(東京大学言語学論集(1995) 14、p.287 - p.317)
- Smirnova, Elena 2006: Die Entwicklung der Konstruktion würde + Infinitiv im Deutschen. Berlin/ New York. de Gruyter.
- Streitberg, Wilhelm. 1981: Gotische. Syntax. Heidelberg: Carl Winter.
- Wilmanns, Wilhelm. 1967: Deutsche Grammatik. Straßburg 1906; Nachdr. Berlin: de Gruyter 1967